

# 和 牛

## 冬の飼養管理

和牛試 瀬島 源喜

今年の丑年もあと1ヵ月で終り、来年は寅年がくる。本年の岡山の和牛界最大の行事であった中国連合畜産共進会には多数の入賞を勝ち取り、全国的に一段と声価を上げることができた。この成果を保持し向上につとめ、さらに和牛経営の合理拡充を図る必要があることは申すまでもない。

ところでこれから迎える和牛飼育に1番困難な冬の飼養管理について述べ参考に供したいと思う。

### 防 寒

青草期に比べて、基礎飼料の質が低下するうえに寒さが来襲する。この寒さをどうして防止するか、牛個体が寒さを防ぐために要する飼料を牛舎整備によって如何に少なくするかという点から、まず牛舎の保温に心掛けなくてはならない。すなわち牛舎の外囲りのムシロ囲い、特に隙間風の防止に注意し、充分な敷料入れて保温とともに舎内の清潔をはかることが必要である。アムモニヤガスの発生する厩肥や深まやの厩肥は適当に入れ替える。また舎内を立込んでしまつて換気ができないようにしては、折角の保温もその効果を半減するので、換気孔等については充分注意して空気抜をつくる必要がある。

### 手入・日光浴

舎飼のみに片寄つて牛体の手入見浴を忘れていると、皮膚病、外寄生虫等が発生するしビタミンDの欠乏を来すので、天気の良い日の午前中は必ず南側の日当りのよい日溜りに出して牛体の手入とあわせて充分な日光浴をさせることが必要である。ただし急な冷込み、寒波の襲来には事前に注意しなくてはならない。

冬の間日溜りに牛を出しているような農家は、おおよそ経営成績がよいということをよく見て知るべきである。

### 飼料給与

調整、貯蔵飼料が充分であっても青草期に比して栄養分が不足し勝である。とくに蛋白質、カルシウム、ビタミン類の不足を来すので給与飼料に注意する。

カルシウムビタミン給与のため、コロイカル、鉍塩などの不断給与がよい。また粗飼料等についても充分な乾草、サイレージの無い場合が多いので、自然稲藁給与になるが、この場合は少し手数がかかっても石灰藁に調製して給与することが必要である。

### 繁 殖 牛

現在の県下での種付の状態からみて、生産雌牛の殆んどは妊娠中とみてよい。すなわち冬舎が妊娠の中期になるものが多い。飼養の面からいうと一番悪いときに親牛の体格維持と胎児の発育を促進しなくてはならないから、とくに蛋白質に富んだ飼料の給与が大切で、これには尿素飼料等の利用も考えられ、油粕類の添加も考慮する必要がある。不足勝なカルシウム、ビタミンについても前記のように補給してやる。

繁殖牛の飼養は要は仔牛の連産が第1であり、母体の維持が大切であるから年間を通して栄養保持につとめ、哺乳と発情が両立するように平素の飼料管理に注意することである。困難な冬飼いにおいては、今後とも自給飼料の調整、貯蔵に計画性をもつべきである。

### 育 成 牛

将来繁殖、種雄など優秀な基礎牛とするためには冬飼いで発育の停滞があつてはならないので、発育飼料等に骨格を構成する飼料と筋肉を造り上げる飼料を給与することが大切である。すなわち、蛋白質とカルシウム分とビタミンAの豊富な飼料である

## 岡山畜産便り 1961. 11・12

良質の乾草、特に荳科乾草を多分に混じたものを充分与える。濃厚飼料も蛋白質に富んだヌカ類、油粕類などを多く配合することが必要である。

このことは肋張をよくすると共に、腹囲を大きくし、将来粗飼料の利用を大きくするためにも良質乾草の多給は絶対必要である。

つぎに運動を充分することである。このことは将来長く使用するためにも当才の間はやや固めに育成することが必要で、肉付より骨格を作るという考え方から、冬期間でも適当な運動を課することが必要である。ために天気の良い午前中は努めて小運動場などで自由運動を行なう。しかし体型を保つ上からは急傾斜地はさけた方がよい。また肢蹄の将来健全な体を支えるためにも、小さいときから体型にあわせた矯正削蹄を冬期間においても2回位することが必要である。

育成も明2才となると当才当時幾分固めに伸した牛に肉をつけて仕上げの時となるので、冬期間といっても飼料の配合関係を充分考慮しなくてはならない。蛋白質も当才より幾分少ない飼料でもよいが、脂肪に富む飼料等は冬期間の運動不足でぶよ肉となることがあるので注意しなければならない。運動も天候をみて過ぎない程度に行なうこと。

なんといっても飼料の不足勝なこの時期に育成中の牛は、発育停滞を来さないよう飼料関係に注意することと、運動、日光浴を充分にすることである。

## 肥育牛

ほとんどが出荷仕上りで正月肉最後の努力中であるが、この時期には急性鼓張症など不慮の事故が発生しやすい時なので、細心の注意をすると共に、系統共販など事前に販売方法もよく研究しておかなくてはならない。

このほか冬期間の疾病としてはやはり感冒等が多いが、冷たい水の多給や冷え込みなどによる胃腸障害等も相当見受けられるので充分注意が必要。また発情の静かな牛は牛房へ入れたままにしておくことと見落とすことがあるので、前述のとおり天気の良い日

は舎外に出して、外部寄生虫の有無等とあわせて充分に観察することが必要である。

和牛の飼養頭数も用畜化の観念と経済的多頭飼育化により漸次増加の傾向が見え、飼養規模の拡大とともに飼養管理の優劣は大きく畜産経営を左右することになった。和牛経営においても現在より以上の経営収入を図らねばならないときが来ているが、農家各自ももう少し和牛の飼養管理の内容について考え、新しいよい方法を研究することが必要だと思われる。丁度正月休みを利用するなどして、近くの家畜保健衛生所、農業改良普及所や畜連支所の指導員を囲んで、より進んだ、より経済的な、より収入の多くなる経営について話し合うことも冬期間に行なうべき経営改善の有効な方法であろう。